

ナチ期ユダヤ人障害者の救援とオットー・ヴァイト

メタデータ	<p>言語: jpn</p> <p>出版者:</p> <p>公開日: 2020-07-06</p> <p>キーワード (Ja):</p> <p>キーワード (En):</p> <p>作成者: 岡, 典子</p> <p>メールアドレス:</p> <p>所属:</p>
URL	<p>https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1226</p>

ナチ期ユダヤ人障害者の救援とオットー・ヴァイト

岡 典 子

1. はじめに

ナチ期のドイツには、ナチズムに敵対した幾多の無名市民が存在した。彼らの体現した「市民的勇気」¹⁾は、「記憶文化」としてナチスの過去を国民意識に定着させようとする現代ドイツにおいて、青少年に対する政治教育の中心的理念となっている。

反ナチ活動の復権の試みは、1960年代以降ナチ体制打倒を目ざした軍民エリートの活動を中心に本格化した。無名市民の行動は久しく顧みられなかった。知識層と異なり、無名市民のそれを深い思慮を欠いた場当たり的な行動とみる立場が支配的だったからである。

ユダヤ人の救援を主とした無名市民の活動は、地下活動という性格に加え、自らの思想や活動を表す機会や習慣にも乏しかったから、記録や痕跡を一切残さず、史資料の現存という点で制約がある。しかも戦後ドイツにおいて、反ナチ抵抗運動は東西の占領軍政府によって否定され無視されている²⁾。そうした彼らの存在がようやく研究対象となるのは、1990年代以降である。

では、本稿がこうした無名市民の反ナチ活動を取り上げるのは何故か。それは、彼らの活動に自己の良心に基づく行動、弱者に対する連帯意識等「人間形成」にかかわる思惟を見いだせるからである³⁾。その際「市民的勇気」は格好の研究対象となるだろう。現代ドイツの政治教育において、無名市民の反ナチ活動が重要な位置にあるのも、彼らの行動が青少年の行動を規定する指標とみなされているからである。

本稿が取り上げるオットー・ヴァイト (Weidt, Otto August 1883-1947) は、ユダヤ人救援に尽力した無名市民のひとりである。彼の活動の特徴は、自身が盲人であったこと、救援対象となったユダヤ人のなかにも盲人が多数含まれていたことである。この救援者、被救援者の双方が障害者であったヴァイトの活動は、優生学が席卷したナチス・ドイツにあって、自らの意志によって精力的に生きた障害者がいた証しであり、無名市民の反ナチ活動の幅広さを表している。さらに、救援対象となった障害者に目を向ければ、ユダヤ人にして、障害者でもあるという二重の意味で弾圧の対象であった人々に対しても、救援の試みが存在したことを意味している。

ヴァイトに関する研究は緒についたばかりであり、2017年にドイツ現代史研究者カイン、R.によって刊行された評伝が唯一の学術書である⁴⁾。同書は、とくにヴァイトが青年期にアナキズムに傾倒した点に着目し、その生涯を詳細に記述している。しかし、そこには少なくとも二つの究明すべき課題が残されている。

第一は、ヴァイトの活動に協力した人々に関する検討である。ユダヤ人の救援は、多くの場合複数の協力者を必要とする。彼にも協力者がいたことは、すでにカイン等によって指摘されているが、その活動や人間関係の詳細は未解明である。第二は、ユダヤ人障害者につい

てである。ナチ期に生きた彼らの実像にせまることは、ヴァイトの活動をユダヤ人障害者の生と尊厳という観点から解釈するうえで必須である。これまで、障害者即無力な存在とみなす記述に終始し、その多様な姿に着目することはなかったからである。

以下、本稿では、ユダヤ人障害者の生存をめぐる人間的連帯という観点から、ヴァイトとその協力者たちの活動の実体を究明しよう。こうした社会的弱者がさらに弱い立場の者を救おうとした活動を照射することは、反ナチ活動の核心を衝くものともなるだろう。

2. 無名市民とヴァイトへの着目

2.1. 戦後否定された市民の反ナチ活動

「青少年が学校でドイツ現代史を学ぶならば、加害者、同調者、傍観者だけでなく、ユダヤ人救護活動に協力した者や救援者についても知るべきだ。彼らの存在もまた、第三帝国の時代の真実である」⁵⁾。

この言葉は、2001年3月11日に連邦大統領ヨハネス・ラウがベルリンで行った演説の一節である。彼は、かつてユダヤ人の救援に従事した無名市民を「沈黙の勇者たち (Stille Helden)」と称え、その行動をドイツ史に永久に刻むべきだと強調した⁶⁾。そのことばは今日、「ドイツ抵抗運動記念館」での「沈黙の勇者たち」に関する常設展示、各種記念碑の設置、さらには学校教科書への掲載等を通じて具現している。しかし、そこに至るまでには長い年月を必要とした。

反ナチ抵抗運動の再評価が始まるのは、東西分断国家の成立以後である。しかし、その活動が評価されるか否かは政治体制と連動していた。たとえば、東ドイツでは、本来階層横断的な草の根組織であった「ローテ・カベレ」が共産主義者の抵抗運動として称揚されたのに対し、西ドイツではこれを無視したように。

「7月20日事件」の実行者たちに対する名誉回復を事実上の争点とした西ドイツの「レーマー裁判」(1952年)は、彼らを国家反逆者の烙印から解放した。これを指揮した検事長フリッツ・パウアーは、ナチス・ドイツを「不法国家」と断じ、彼らの行動を正当な「抵抗権」に拠ると主張して、さらに無名市民にも敷衍しようとした⁷⁾。だが反ナチ活動を軍民エリートに限定する考えが法曹界に一般的であっただけでなく、国民も抵抗運動自体に無関心であった。

こうしたなかで、ユダヤ人救護活動の実体を明らかにし、自身や同胞を救った恩義に報いようとしたのはユダヤ人たちであった。1956年、ユダヤ人ジャーナリスト・グロスマン、K.R. は、新聞紙面を通じてユダヤ人の救援に関与した人々の情報提供を呼びかけた。集まった情報は100件を超え、それをもとに翌年『称えられない勇者たち—暗黒期のドイツにおける人々—』が出版される。彼はその意図を「わが祖国は正しかったか否か」を問うことにあるとし、未だナチ期の現実を直視しないドイツ国民を糾弾した⁸⁾。

グロスマンの書籍に反響はあったが、その範囲は限られていた。同書に呼応した西ベルリン・ユダヤ人協会は、2000マルクを拠出し「称えられない勇者たち」基金を創設した。これを原資として西ベルリンは1958年、「称えられない勇者たち (Unbesungene Helden)」

の顕彰事業を開始する。事業を主導したのは、自らも「2分の1ユダヤ人」として迫害と潜伏生活を体験した同州内務大臣リプシッツ, J. であった⁹⁾。

1960年4月の法律化を経て1966年まで続いたこの事業は、ユダヤ人救援活動に尽力した無名市民の存在を公に認めた点で、画期的であった。顕彰を受けた西ベルリン市民は760人にのぼり、そのなかにはヴァイトの未亡人エルゼ(1902-74)をはじめ、後述する彼の協力者ゲルナー, Th. (1884-1971) やダイベル, K. (1897-1981) も含まれていた。グロスマンが書名に用いた「称えられない勇者たち」もまた、ユダヤ人の救助と助力にかかわった無名市民を表す用語として定着する。しかし、顕彰事業は他州に拡大せず、一般市民が関心をもつこともなかった。結局、ユダヤ人救援者への着目は、事業を牽引したユダヤ人と一部のドイツ人関係者にとどまり、社会全体の認識とはならなかったのである。

2.2. 無名市民の顕彰と英雄視されたヴァイト

以上のような無名市民のユダヤ人救援が着目されるには、まずホロコースト問題自体に目が向けられる必要があった。

戦後史を通観すると、この問題に国民を対峙させた要因に社会民主党(SPD)初の西ドイツ首相ヴィリィ・ブランドのワルシャワ訪問(1970年12月)があるが、彼にはナチ期の検証にかかわる反ナチ活動研究など東西ドイツ学術交流を促した功績もある。

さらに1980年代には、人間の尊厳と自由に殉じた無名市民を称えるヘルムート・コール首相の演説を通じて、彼らの反ナチ活動もようやく注目されるようになった¹⁰⁾。加えて、西ドイツの学生運動を主導した「68年世代」にとって、ナチスの過去を暴くことは長年の命題でもあった。ドイツ社会の中堅となった彼らは1980年代以降、歴史研究をはじめ学術、政治等の各分野で発言力を強めていく。

こうして統一ドイツ後の1990年代から21世紀転換期には、無名市民によるユダヤ人の救援は、学問的にも、社会的にも重要な関心対象に浮上した。彼らの行動はもはや場当たり的でも衝動的でもなく、明確な意志による反ナチ活動として位置づけられた。かつて「称えられない勇者たち」と呼ばれた彼らは、自身の活動を胸中に秘し、生涯語らなかつた美徳から「沈黙の勇者たち」と称えられるようになった。なお、この用語を社会に広めたのは、ヴァイトの救援によってホロコーストを逃れたユダヤ人女性のひとりであり、戦後はジャーナリストとして活躍したドイチュクロン, I. (1922-) である¹¹⁾。各種の研究成果や出版物の刊行が相次ぎ、2008年に開館した「沈黙の勇者たち記念館」等各種の記念館は、彼らの行動の検証と伝承を担う発信地となった¹²⁾。そうした進展の背後には、無名市民の実態解明と啓発活動に尽力してきたシュタインバッハ, P.、トゥッヘル, J.、ベンツ, W. 等の著名な歴史家たちの努力があった。

さて、オットー・ヴァイトは、こうした「沈黙の勇者たち」のひとりだが、その名は比較的良好に知られている。ヴァイトが初めて文献に登場するのは、前述のドイチュクロンの自叙伝『黄色い星を背負って』(1978年)においてである。東ドイツでも作家シアー, R. の短編『ブラシ工場オットー・ヴァイト』(1984年)が文芸雑誌に掲載されている。

ドイチュクロンは、その後も演劇の脚本、絵本の出版、テレビ映画の放映等、様々な手段

によってヴァイトの功績を伝えてきた。2006年に開設されたベルリン市の「オットー・ヴァイト盲人作業所記念館」も、彼女の努力に負っている。

ドイチュクロンのヴァイト紹介によって、彼の名は高まったが、しばしば障害のある偉人という固定的なヴァイト像が生み出された。たとえばヴァイトは今日、基礎学校第4学年用宗教科指導書のなかで、自由と正義を学ぶ題材として詳細に記述されている¹³⁾。また、ドイチュクロンの絵本『パパ・ヴァイト』を用いた授業展開の手引書も刊行されている¹⁴⁾。両者ともにヴァイトを英雄として描き、救援活動もヴァイトひとりの努力で行われたかのような印象を受ける。

しかし、こうした記述は史実と異なるだけでなく、ヴァイトの活動の本質をも損なうものである。というのは、障害者は社会的な偏見と差別の対象であった。にもかかわらず、障害者ヴァイトに信頼と共感を寄せ、危険を顧みず行動を共にした多彩な協力者がいた事実こそが、ヴァイトの活動の根幹にかかわる重要な観点だからである。

3. ユダヤ人障害者の救援

3.1. 迫害されるユダヤ人障害者

周知のように、ゴルトン, F. が提唱した優生学は、欧米を中心に19世紀末から20世紀前半の各国を席卷した。各国は人種衛生や社会防衛の手段として障害者の安楽死、婚姻制限、施設隔離あるいは断種を競うように推進したが、なかでも優生学が隆盛を極めた国家の典型例が、アメリカとナチス・ドイツであった。

人種衛生と経済的負担の軽減を原則としたナチ期の障害者政策のなかで、今日広く知られるのは、重度の知的障害者や精神疾患者を主な対象として行われた安楽死（「T4作戦」）であろう。盲人は安楽死の対象でこそなかったが、その原因が遺伝性疾患である場合には、人種の劣化をもたらす存在として、ドイツ人・ユダヤ人を問わず断種の対象となった¹⁵⁾。一方で、ナチス政権は、第一次世界大戦のドイツ人傷痍軍人を「一等市民」とし「英雄」扱いした¹⁶⁾。

いずれにせよ、ナチ期の障害者を一律に無力で受け身的な存在と捉えるのは、正確ではない。自らを守る術をもたなかった知的障害者等とは異なり、ドイツ盲人のなかには、法律家兼盲人権利擁護の運動家クレマー, R. のように断種政策を公然と批判した者も存在した。また、詳細は不明だが、共産党支持者として反ナチグループに所属した者もいた¹⁷⁾。さらに盲人自身が中心的役割を果たした各種の当事者・支援者組織は、相互扶助にとどまらず障害者の権利擁護を求める運動をも展開した¹⁸⁾。

彼らがこうした力をもちえた背景には、1806年からナチ期まで約130年間続いてきた盲学校教育があった。盲学校は盲人に文字や言葉、論理的思考をもたらし、彼らの出会いの場となり連帯のきっかけにもなった。大学に学んだ少数の人々は、同じ障害をもつ同胞の生活と社会的地位の向上を求める運動の先頭に立った。差別や偏見が支配したナチ社会にあって、たとえ安楽死や断種の対象でなくとも、障害者は相対的に社会的弱者であり、自ずと差別や偏見にさらされていた。だからこそ、当事者同士の連帯・協力は、互いの身を守るため

に不可欠であった。

では、ユダヤ盲人たちはどうであったか。1930年代初頭のドイツには、傷痍軍人の組織を含め、盲、聾、肢体不自由の障害種別に当事者・支援者組織が機能していた¹⁹⁾。ナチス政権が発足すると、ユダヤ人障害者は即座にこれらの組織から排除された。こうしたなか「ドイツ・ユダヤ盲人自助グループ」(1934年設立)のように、新たに報告書の発行、ユダヤ人の習慣と文化、誇りの継承のほか、国外移住や就労の情報提供、苦境にある同胞の励まし等につとめた事例もある²⁰⁾。

だがついに1939年秋、最初のドイツ系ユダヤ盲人がポーランドに強制移送される。ちなみに第一次世界大戦に従軍したユダヤ人傷痍軍人をも収容する旧チェコ領テレジエンシュタット収容所には、「福祉棟」と称する一角に盲人ゲッターが作られ、1943年7月には565人が、同10月には668人がここに収容されたという²¹⁾。

一方、盲人のなかには、国外移住を試みた者もいた。1934年にアメリカに移住した盲人女性教師ヒルシュ、B.や、イギリス・ユダヤ盲人避難支援委員会の主導により、イギリスに移住した4名のウィーン・ユダヤ人盲学校生徒等はその実例である²²⁾。とはいえ、こうしたケースは例外であり、大多数のユダヤ人障害者にとって、障害は国外移住の妨げとなった。ヴァイトが支援しようとしたユダヤ盲人のなかにも、障害ゆえに相手国から国外移住を拒否された者や、家族だけが国外に移住し、自らは残留した者もいた。

要するに、ヴァイトが救援を試みたユダヤ人障害者は、ナチス政権により「盲人の社会」から排除されただけでなく、国外から、さらに家族からも事実上見放された人々だったのである。

3.2. オットー・ヴァイト盲人作業所

「私は盲人作業所、つまり手仕事の工場を所有しています。そこでは盲人が箒とブラシを作っています。この工場は1940年から45年まで、ユダヤ人とゲシュタポの間に起きた事件の渦中にありました。工場はこの時期、165人のユダヤ人に労働の場を提供しました²³⁾。ここでは、彼らは奴隷のようにではなく、人間としての扱いを受けましたし、そのために私は、日々、この上なく強力な嘘の逃げ道を用意しなくてはなりませんでした。1941年に活動を始めてから1945年3月まで、もっとも重要な軍備にかかわる製品の製造を行っているという口実のおかげで……実際はまったくちがったのですが……本当に骨の折れる困難なことでしたけれども、嬉しいことに従業員たちのほとんどがいつもゲシュタポの連行から逃れることができました。(中略)52回の家宅搜索、11回の逮捕、そんなものは私にとって取るに足らないことでした」²⁴⁾。

1947年10月21日、ヴァイトはアメリカ・ニューヨークのユダヤ系雑誌『再建 (Der Aufbau)』編集部に送った書簡のなかで、自らのユダヤ人救援活動をこのように認めている。ヴァイトによるユダヤ人救援は当初、自身が経営する盲人作業所での雇用というかたちをとった。その目的は、重労働を強制された彼らの保護にあった。彼は、国防軍への製品の納入により「戦争遂行上必要な企業」の認可を獲得し、従業員を収容所移送から守るうえでの口実とした。つまり国防上の貢献を救援の隠れ蓑としたのである。さらに、強制移送が本



写真1 ヴァイトと盲人作業所の従業員たち
(出典：Museum Blindenwerkstatt Otto Weidt)



写真2 事務室で働くヴァイト(左手前)、秘書リヒト,A.
(左奥)、共同経営者クレマート,G.(右) (出典:同左)

格化する 1942 年以降になると、秘密裏に生活できる場所と食料の提供が主たる救援活動の形態となった。

ヴァイトは 1883 年、ロストックの貧しい壁紙職人の家庭で出生した。国民学校卒業後は父親のもとで修業し、壁紙職人として工房をもつが、1924 年前後に失明する。その後、盲人の典型的な手仕事とされた箒やブラシ製作の技術を修得し、1936 年頃にはベルリン市クロイツベルクにブラシ製作の作業所を開設している。ここで彼はすでに、盲人を含む数人のユダヤ人（実数不明）を雇用している。しかし、本格的な救援活動の開始は 1940 年 8 月、当時ユダヤ人が多数居住していたベルリン市ハッケシャー・マルクトに作業所を移転してからである²⁵⁾。

では、ヴァイトが救援を試みたユダヤ盲人は、いかなる人々だったのか。当時、ヴァイトの作業所で働いていた前述のドイチュクロンは、盲人たちは 30 人ほどの男性と数人の女性であったこと、うち数名は盲聾者であったこと、男性のうち晴眼の妻をもたない者は、ユダヤ盲人施設で生活していたことを指摘している。また作業所と盲人施設との間の日々の往復には、盲人施設の職員が付き添ったという²⁶⁾。

30 数人という盲人従業者の数をどう理解すべきか一概には言えないが、前述の「ドイツ・ユダヤ盲人自助グループ」によれば、1925 年の時点で、ドイツ全土に居住していたユダヤ盲人の数を 356 名と推測している。この数字は当時の欧米における人口 1 万人あたりの盲人の発生率から試算しており、第一次世界大戦の傷病失明者は含まれていないが、実数と比較してさほど大きな隔たりはなかったと思われる²⁷⁾。

先のドイチュクロンのいうユダヤ盲人施設とは、1910 年から 1941 年までベルリン市シュテグリッツに存在した「ドイツ・ユダヤ盲人施設 (Jüdische Blindenanstalt für Deutschland)」である。同施設は、ナチ期には自活困難な成人盲人に対して寝食の場と施設内労働（ブラシ等の製作）を提供する保護収容施設となっていた²⁸⁾。施設入所者たちが、いかなる経緯でヴァイトの作業所に雇用されたのか、詳細は明らかでない。しかし、同施設が 1941 年には閉鎖に追い込まれていることからみて、たとえ全員ではないにしても、相当数の入所者が保護を求めてヴァイトの従業員になったと思われる。

ここで注意しておきたいのは、ナチ期のドイツにおいて、決してすべてのユダヤ盲人が施設で保護を受けていたのではないことである。当時ベルリンで生活していたユダヤ盲人のなかには、タイピスト、音楽家、小売業者、作家等の職業をもち、地域社会で自立した生活を送った者も少なくなかった²⁹⁾。ヴァイトの従業員のなかにも、ユダヤ人がそれまで従事してきた職業を事実上禁止され、強制労働へと駆り立てられる 1930 年代末までは、小売業者や音楽家等として自立していた人々もいた³⁰⁾。

一方、盲人施設の入所者の多くは、平均以下の知的能力、高齢あるいは中途失明等により、自立に必要な知識や技術の修得が困難な人々であった。つまり、ヴァイトが雇用したのは、盲人全体のなかでもとくに弱い立場の施設入所者だったのである。

弱者に寄り添うヴァイトの姿勢は、盲聾者の雇用により一層鮮明にみてとれる。盲聾者は多くの場合、作業所での労働はもとより、食事や歩行といったごく日常的な動作にさえ、常に他者の手助けを必要とすることは容易に理解されよう。加えて、声による会話や意思疎通も不可能である。盲人がブラシ製作等の作業を行う際、音は手指の感覚と並んでとくに重要な手がかりであったが、その音による情報さえ遮断されたのが盲聾者である。したがって、盲聾者がヴァイトの作業所で箒やブラシ製作に優れた能力を発揮したとは考えにくい。つまり、ヴァイトが彼らを雇用したのはその労働力に期待したからではなく、雇用を根拠に彼らが有能な労働者であると強調し、ナチスから彼らの生命を守るために他ならなかった。

ここにオットー・ヴァイトの救援活動を貫く人道的性格をみてとることができる。その意味で、ベルリン・ユダヤ労働局長エッシュハウス, A. が 1941 年にヴァイトに伝えたという次の言葉は、正鵠を射たものといえる。「あなたには、なんとお礼を言ったらよいか。他では引き取り手のないような者たちを、いつも受け入れてくださるのですから」³¹⁾。これをさらに穿った見方をすれば、体制組織の一員でありながら、ヴァイトに共感するエッシュハウスの心中も推測される。

では彼の活動はどのように展開されたのか。

4. ヴァイト救援活動の協力者

4.1. 被迫害者の人間的連帯

「P 夫人と知り合ったのは、彼女がうちの工場の従業員になったことがきっかけでした。彼女はうちの夫からの信頼に応えてごく自然に潜伏ユダヤ人救援活動に協力してくれるようになりました」³²⁾。ヴァイト死後の 1958 年 11 月、妻エルゼはこう回想している。P 夫人とは、ヴァイトの協力者のひとり、娼婦ポルシュッツ, H. (1900-1977) である。娼婦に加えて闇市での商売も生業とした彼女は、ヴァイトが匿うユダヤ人たちのために食料や生活物資を非合法に調達し、偽造身分証明書を提供し、自宅を隠れ家として提供した。さらに、強制移送された人々のために、食料を何度も収容所に送っている³³⁾。

商業学校を終え速記タイピストの経歴をもつ彼女が娼婦となったのは、経済的困窮のためと思われるが、いかなる理由でヴァイトに協力したのかは定かでない。だが彼女は既婚者であり、出征中の夫はナチの信奉者であった。したがって救援活動が彼女に孤独な決断と勇気

を要するものであったかは疑いない。もっとも実母は彼女の理解者であり、娘の求めに応じて、潜伏ユダヤ人の保護にも協力していた。

反ナチ活動者としてのボルシュッツの覚悟は、警察本部の真向かいの自宅アパートに、ユダヤ人姉妹を匿った事実表れている。これについて、匿われた女性のひとりベルンシュタイン, A. はのちにこう記している。「ボルシュッツさんは、それがどんなに危険かを理解し、私たちとの同居が彼女の生活の妨げとなるのを承知で、私たち双子の姉妹を匿ってくれたのです」³⁴⁾。

ボルシュッツが担った多彩な役割から、ユダヤ人救援に際していかにさまざまな活動が必要であったかがわかる。そこで、ヴァイトの活動を支えたのはどのような人々であり、彼らが担った役割は何であったかをみてみよう。

ヴァイトと彼の協力者に特徴的なのは、障害者であったヴァイトを含め、協力者の多くが、社会的被被害者・弱者であったことである。ヴァイトには、氏名のわかる協力者だけでも10数名いた。そのなかには、ボルシュッツをはじめ、印刷所経営者ゲルナーや広告業者ダイベル、ユダヤ人協会の職員で元技師ローゼンタル, H. (1903- 没年不詳)、同じくユダヤ人医師ヘルト, G. (生没年不詳)とドイツ人妻イルマ (生没年不詳)、ユダヤ人音楽家の夫と死別したクリーニング店主トロストラー, E. (1883-1949)、クリュッツフェルト, W. (1880-1953) 署長をはじめハッケシャー・マルクト地区を管轄する第16管区警察署の警察官らが出た。

ユダヤ人として自分も死の恐れのあるローゼンタルやヘルトが、救援を求める側ではなく、救援する側の立場で行動した事実は重要である。だが、身の危険に直面し、あるいは排斥される立場にあったのは、彼らだけではない。たとえば、娼婦は「反社会的」存在であり、警察による拘禁や強制収容所の対象であった³⁵⁾。ゲルナーとダイベルは、それぞれナチ政権が弾圧した社会民主党と共産党の確信的な支持者であった。彼らもまた、逮捕されれば強制収容所送りや処刑が待っていた。「混血婚 (Mischehe)」は、ニュルンベルク人種法によって禁じられた行為であり、ユダヤ人を配偶者にもつイルマは、「人種の面汚し」として執拗に離婚を迫られた。さらに、こうした人々を表向き取り締まるべき第16管区は、実際には「ナチ的な秩序」に従順ではない警察官が半ば懲罰的に配属される部署であった³⁶⁾。

前述したように、ヴァイトの救援対象には、多数の障害者が含まれていた。しかし、彼らに手を差し伸べたヴァイトや協力者たちもまた、ドイツ社会のなかで相対的に弱い立場に追いやられてきた。要するに、自らも排除や差別の対象であった人々が、弱者のなかでももっとも弱い立場にある者を救おうとした活動こそ、ヴァイトらのユダヤ人救援だったのである。

では、その活動は具体的にどのようなものであったか。

ヴァイトのユダヤ人救援は当初、作業所への雇用によって過酷な強制労働と非人間的な処遇から、彼らを保護することにあった。しかし、東部地域への大量移送がはじまる1941年10月以降、彼らをいかに収容所移送から守るかが課題となった。ヴァイトは、国防軍への安定的な製品納入にユダヤ人従業員が必要だと訴えたが、所轄のゲシュタポと交渉するうえで賄賂は必須であった。実際彼はこの手段を最大限に利用した。そのために、彼はボル

シュッツとともに香水やブランドー、煙草等の品を闇市で入手した。

一方、ローゼンタルは職務上、ユダヤ人連行の期日等を事前に把握できた。彼はそうした極秘情報をヴァイトに伝え、ユダヤ人の同胞を「手入れ」から守ろうとした。第16管区の警察官もまた、ゲシュタポの動向をヴァイトに伝え、注意を促した。さらには出自を隠して生き延びようとするユダヤ人たちのために、身分証明書まで発行した³⁷⁾。

だがゲシュタポのユダヤ人連行が激しさをますますにつれ、ヴァイトのユダヤ人救援は、雇用から潜伏生活の支援へとかたちを変えることとなる。このとき自宅や自身の経営する工場等を隠れ家として提供したのは、ヴァイトに加え、ボルシュッツやその実母、ゲルナー、ダイベルらである。隠れ家は常に密告の危険と隣り合わせであったから、ゲシュタポの動静に関する情報入手や、「手入れ」に遭った際の交渉は、引き続き重要な役割となった。

戦時下の食料不足と配給制度のもとで、表向きは存在しない潜伏ユダヤ人に対して、日々の食料を確保するのは至難の業であった。ヴァイトとボルシュッツは闇市で食料の入手に奔走し、イルマやトロストラー等の女性は潜伏者の身の回りの世話をした。ヘルトは発病した彼らの治療にあたった。

このようなヴァイトたちの活動から、弱者への憐みや人間的な連帯感にもとづく動機が十分にみてとれよう。だがそれだけではない。彼に協力した人々の行動にいま少し立ち入ると、弱者救済とは異なるヴァイトのもうひとつの側面が現れるからである。最後にこの点に言及しよう。

4.2. 諸抵抗グループとの関わり

ヴァイトの協力者たちのなかには、彼との連携とは別に、反ナチグループやユダヤ人救援者と接点をもち、精力的に活動した人々もいた。彼らは仲間をヴァイトに紹介することで、両者が知り合うきっかけを提供した。

たとえばローゼンタルは、ユダヤ人抵抗グループ「平和と再建の共同体 (Gemeinschaft für Frieden und Aufbau)」ともつながり、確信的な反ナチ活動家のユダヤ人シャルフ, W. (1912-1945 刑死) をヴァイトに引き合わせた。また、社会民主党の支持者であったゲルナーは、ユダヤ人バウム, H. (1912-1942 刑死) 夫妻が率いる共産党系反ナチグループ「バウム・グループ (Baum Gruppe)」のメンバーを匿い、その縁でヴァイトの作業所に匿われたメンバーもいたようである³⁸⁾。同グループのユダヤ人たちは、潜伏しながらも反ナチ活動を継続したが、結局 1942 年 5 月には逮捕されている³⁹⁾。

一方、共産主義を支持したダイベルはベルリンの抵抗者たちとの間に幅広いネットワークをもち、共産主義者ゼフコフ, A. (1903-1944 刑死) の率いる国内有数の抵抗グループ「ゼフコフ・ヤコブ・ベストライン・グループ (Saefkow-Jakob-Bästlein-Gruppe)」と結びついていた⁴⁰⁾。さらに、このグループは、「ローテ・カペレ」や「クライザウ・サークル」などの市民グループとも接触があった⁴¹⁾。

ナチ体制打倒を目ざしたこれらの抵抗グループとヴァイトとの結びつきの詳細は、現時点では明らかではない。しかし、直接であれ、協力者を介した間接的な結びつきであれ、彼がこうしたグループと接点をもっていたことは、紛れもない事実である。このことは、ヴァイ

トのユダヤ人救援が、彼と少数の協力者の間で完結した弱者救済の活動にとどまらず、ベルリンさらにはドイツ全土に展開した反ナチ運動の一端であった可能性を示すものである。

ヴァイトと反ナチ活動者との接点は、ヴァイトが保護したユダヤ人のなかにも見てとれる。ヴァイトとボルシュッツに匿われたユダヤ人ゼーリッヒ兄妹は、ダイベルと同じグループに属し、精力的に反ナチ活動を展開した。ヴァイトの従業員であった盲人女性カツツ, R. の弟ジークベルト (1899-1942) もまた、「ユダヤ人政治犯」としてアウシュヴィッツで殺害された。ヴァイトの秘書として保護されたユダヤ人女性リヒト, A. (1916-1987) は、同様に支援を必要とする同胞たちをヴァイトらに紹介して、彼らの救援に努めた⁴²⁾。

このようにみえてみると、ヴァイトやその協力者と、反ナチ活動に関与したこれらの晴眼のユダヤ人たちの関係が、決して保護－被保護といった一方向的なものでなかったことは明らかであろう。げんにヴァイトは 1942 年 7 月、リヒトと自分との人間関係の根底には「僚友意識 (Kameradschaft)」があると記している⁴³⁾。ヴァイトらにとって、ユダヤ人障害者の救援が弱者を守るための闘いであったとすれば、反ナチ活動に与した晴眼ユダヤ人の救援は、志を同じくする者同士の精神的共鳴に支えられたものであった。

5. むすび

以上、社会的弱者による市民的勇気の体现という観点から、ヴァイトとその協力者たちのユダヤ人救援活動に言及してきた。彼らがユダヤ人救援活動に身を投じるにいたった詳細な経緯は明らかでない。しかし、反ナチ活動に関わる近年の研究によれば、およそ 7 割の者は活動への関与を即決し、8 割の者は他者に一切の相談なく決断したという⁴⁴⁾。その一方で、決断の背後にある人道的態度は、長年の人格形成の過程で、経験と教育を通じて培われたものであることも指摘されている⁴⁵⁾。してみれば、ヴァイトや彼の協力者についても、その心性と行動力を育んだのは、家庭や学校を含む身近な人間関係であり、そのなかで会得した価値観に他ならなかったであろう。

では、反ナチ活動としてのヴァイトのユダヤ人救援は、いかなる観点から評価されるか。ヴァイトが救援を試みたユダヤ人障害者の大多数は、1943 年 2 月、3 月の「工場作戦」(ベルリンの残存ユダヤ人の一斉摘発)によって強制移送され、結局生命を絶たれた。しかし、そのことは彼の行為の価値を低めるものではない。障害者としての差別を経験し、さらにユダヤ人としての人種の苦難を強いられてきたユダヤ人障害者たちにとって、ヴァイトの作業所は、人間としての処遇と誇り、尊厳を与えられた人生最後の場所であった。同時にそこは、人種の違いや障害の有無を超え、人間同士の信頼と結びつきを確信する場所ともなった。ヴァイトと彼らの間には、同じ障害をもつ者としての痛みの共有があった。また、協力者たちにとって、彼らが障害者であることは、救援活動を躊躇する理由とはならなかったはずである。

このような信頼と連帯感は、ヴァイトと協力者の間にも存在した。ヴァイトと協力者たちにとって、たとえばヴァイトが障害者であることや、ボルシュッツが娼婦であることは、人間関係を結ぶうえで本質的な問題ではなかった。ユダヤ人救援活動においては、救援者、被

救援者を含め、関係者相互の緊密な意思疎通や絶対的な信頼が不可欠であり、そうした連帯意識なしに円滑な活動はあり得ないからである。

ヴァイトと彼の協力者が体現した「市民的勇気」は、「弱者」とみなされた者が掲げた誇りの結晶である。この意味において彼らの行動は、現代社会に対しても人間の強さとは何かを提起する格好の事例といえるだろう。

註

- 1) この言葉は元来、ビスマルクが「戦場の勇気」に対比させた造語であり、市民が自己の責任で決断し事を引き受ける意志を表している。ナチ期に「市民的勇気」を唱導した抵抗者として D. ボンヘッファーが知られている。Steinbach, P.: *Widerstand im Widerstreit. Der Widerstand gegen den Nationalsozialismus in der Erinnerung der Deutschen*, Paderborn 2001, S.419ff. 対馬達雄『ヒトラーに抵抗した人々—反ナチ市民の勇気とは何か—』中公新社、2015 年、257 頁。
- 2) 対馬達雄、前掲書、216-219 頁。
- 3) これについては、対馬達雄「「市民的」抵抗運動グループのナチズム観念—運動課題としての《覚醒》から《人間形成》へ」(『秋田大学教育文化学部研究紀要』第 58 集、2003 年、2 頁) に詳しい。
- 4) Kain, R.: *Otto Weidt. Anarchist und „Gerechter unter den Völkern“*, Berlin 2017.
- 5) Riffel, D.: *Unbesungene Helden. Die Ehrungsinitiative des Berliner Senats 1958-1966*, Berlin 2007, S.11.
- 6) *ebenda*.
- 7) Reichel, P.: *Vergangenheitsbewältigung in Deutschland. Die Auseinandersetzung mit der NS-Diktatur von 1945 bis heute*, München 2001, S.97-106. (邦訳 小川／芝野訳『ドイツ 過去の克服—ナチ独裁に対する 1945 年以降の政治的・法的取り組み』八潮社、2006 年、119-133 頁)。
- 8) 本稿での使用は、Grossmann, K.R.: *Die unbesungenen Helden. Menschen in Deutschlands dunklen Tagen*, Berlin 1984, S.11.
- 9) Rittel, D.: *a.a.O.*, S.11-12.
- 10) 対馬達雄、前掲書、253 頁。
- 11) Vgl. Deutschkron, I.: *Sie blieben im Schatten. Ein Denkmal für „stille Helden“*, Berlin 1996.
- 12) 「沈黙の勇者たち記念館」は当初、ベルリン市ハッケシャー・マルクトの一角にある小規模の展示室にすぎなかったが、企画の充実と情報発信力の強化を目的として 2018 年 2 月に国防省敷地内の「ドイツ抵抗運動記念館」に統合された。
- 13) Gauer, Ch., u.a.: *Bergedorfer Grundschulpraxis. Religion 4.Klasse*, Hamburg 2008¹, 2015⁸, S.57-76.
- 14) Schrader, U.: *Blindenwerkstatt Otto Weidt. Arbeitsmappe für den Unterricht*, Berlin 2005.
- 15) Jaedicke, M./Schmidt-Block, W.(Hg.): *Blinde unterm Hakenkreuz-Erkennen, Trauern, Begegnen. Seminal im November 1989 in Berlin-Wannsee und Materialien zum Thema*, Marburg 1991, S.19ff.
- 16) Poore, C.: *Disability in Twentieth-Century German Culture*, Ann Arbor 2007, p.69-75.
- 17) Lewyn, B./Lewyn, B.S.: *On the run in Nazi Berlin*, Atlanta 2003, p.168ff.
- 18) Poor, C.: *ibid.*, p.125ff.
- 19) *ibid.*

- 20) Selbsthilfvereinigung der jüdischen Blinden in Deutschland e.V. :*Jüdisches Blindenjahrbuch*, 1935/36, 1938/39.
- 21) Jaedicke, M./Schmidt-Block, W.(Hg.) :*a.a.O.*, S.21ff.
- 22) Drows, D. :*Heilpädagogik im deutschen Judentum. Eine Spurensicherung 1873-1942*, Münster 2000, S.54.
- 23) ヴァイトが救援対象としたユダヤ人は、全員が障害者であったわけではない。165名のなかには障害のない人々もいたが、その詳細は不明である。
- 24) *Brief von Otto Weidt an die Zeitschrift „Der Aufbau“ vom 21.Oktober 1947.*
- 25) Kain,R. :*a.a.O.*, S.246.
- 26) Deutschkron, I. :*Ich trug den gelben Stern*, Köln 1978, S.78.
- 27) Selbsthilfvereinigung der jüdischen Blinden in Deutschland e.V. :*Jüdisches Blindenjahrbuch*, 1935/36, S.85ff.
- 28) *ditto*, 1938/39, S.76ff.
- 29) *ditto*, 1935/36, S.77ff.
- 30) *Museum Blindenwerkstatt Otto Weidt*, Berlin 2007, S.40ff.
- 31) Deutschkron, I. :*Blindenwerkstatt Otto Weidt. Ein Ort der Menschlichkeit im Dritten Reich*, Berlin 2014², S.17-18.
- 32) Tuchel, J. :*Hedwig Porschütz.Die Geschichte ihrer Hilfsaktionen für verfolgte Juden und ihrer Diffamierung nach 1945*, Berlin 2010, S.25.
- 33) *ditto*, S.25ff.
- 34) *ditto*, S.38.
- 35) *ditto*, S.19f.
- 36) Gesellschaft Hackesche Höfe(Hg.) :*Die Hackeschen Höfe.Geschichte und Geschichten einer Lebenswelt in der Mitte Berlins*, Berlin 1993, S.74ff.
- 37) *ditto*, S.77.
- 38) Scheer, R. :*Im Schatten der Sterne.Eine jüdische Widerstandsgruppe*, Berlin 2004, S.258f.
- 39) *ebenda*.
- 40) Düring, M. :*Verdeckte soziale Netzwerke im Nationalsozialismus. Die Entstehung und arbeitsweise von Berliner Hilfsnetzwerken für verfolgte Juden*, Berlin 2015, S.134-136
- 41) Holtmann, K. :*Die Saefkow-Jakob-Bästlein-Gruppe vor den Volksgerichtshof. Die Hochverratsverfahren gegen die Frauen und Männer der Berliner Widerstandsorganisation 1944-1945*, Paderborn 2010, S.68, 124, 208.
- 42) Düring, M. :*a.a.O.*, S.138ff.
- 43) Gruzdz, K. :*Alice Licht“...und statt des Danks weich ich zurück.“ in, Blindes Vertrauen. Versteckt am Hackeschen Markt 1941-1943. Ausstellung in der ehemaligen Blindenwerkstätte Otto Weidt, 5. März bis 4.April 1999*, S.10.
- 44) Wette, W.(Hg.) :*Retter in Uniform-Handlungsspielräume im Vernichtungskrieg der Wehrmacht*, Frankfurt a.M.2002, S.21. (邦訳 関口宏道『軍服を着た救済者たち—ドイツ国防軍とユダヤ人救出工作』白水社、2014年、21頁)。
- 45) *ditto*, S.22 (邦訳、22頁)。

【謝辞】 本研究は、JSPS 科研費 19K02419 の助成を受けたものである。